

## 最終章

南スーダンには上述してきたように、英国統治時代の「分割統治」政策が統一スーダンの政治経済に大きな影響を与えた。その結果、現在の南スーダンにあたる南部スーダンの開発は大幅に遅れ、そのことも起因して南部の自治権の確保やスーダンからの分離独立を目指す動きへと発展し、半世紀にわたる内戦が繰り返り広げられた。長期にわたる紛争は、南部スーダンの経済開発をさらに遅らせることとなり、世界でも最も貧しい国の一つとなった。そして、米国を中心とする国際社会の後押しと98%にも及ぶ熱狂的な国民の支持を得て、2011年7月、最も新しい国として独立した。国民の期待と国際社会からの大きな注目を集めるなか、国家建設が軌道に乗っていくと思われた矢先の2013年12月に、一度目の紛争が勃発した。筆者は、2014年の11月にジュバに赴任することとなったが、その当時は、南スーダンの状況から、治安の安定化や教育、保健、社会経済インフラ、農業など国家建設のための重点分野での支援を行っていくことが急務であるとの認識であった。そのため、南スーダンにお

いてスポーツを通じた平和構築支援を行うことは、想像さえしていなかった。多くの読者も南スーダンという紛争が繰り返されるなか、開発が進まない国において、なぜスポーツなのかと本書を手取る前には感じたのではなからうか？ また、南スーダンのような国でスポーツどころではないのではないかと思われたことであろう。私も実際にジュバで生活をすするまではそのように考えていた。しかし、現場で感じたことは、前述してきたように、独立してもなお、紛争が繰り返される南スーダンの多くの国民は、紛争に疲れ、遅々として進まない和平合意事項や政府に対しての不信を抱えていることであった。国際社会が目指す上からの平和構築支援の取り組みと、実際に生活する人々との間には、大きなギャップが存在しているように思えた。そのギャップを埋めるためには、国民間の信頼醸成を含む社会的結束を目指した取り組みが必要であると強く確信した。

国際社会が取り組んでいる平和構築支援のなかで、紛争当事者であり、国家建設の主役であるはずの国民が取り残された形で和平合意プロセスが進められている。それを象徴するような発言を政府間開発機構（IGAD）の議長国であるエチオピアの南スーダン代表から聞いたことがある。同代表と面談したときのことである。そのとき、当時進められようとしていた「国民対話」の重要性を私は彼に指摘した。「国民対話」とは、2016年12月14日の国会において議論されたものであるが、その内容は、国民対話にかかる大統領の計画として暴

力的紛争の終結、国家合意の再構築、安定と繁栄などを進めるために全国的に国民との対話を進めようというものである。しかしながら、和平合意が遅々として進まないなか、「国民対話」を展開していくための十分な予算がなく、その進捗が危ぶまれていたときでもあった。そこで、IGAD 現地代表に、国際社会もこの国民対話を積極的に支援していく必要があるのではないかと話した。すると彼は、この国民対話のことを、「あのようなことをやっても無駄である」と一蹴し、国民対話についてはとても懐疑的である旨を述べた。多くの国際社会のメンバーも、この発言と同様の考えであったに違いない。実際に、日本とUNDPしか、「国民対話」への資金援助をしていない。しかしながら、「国民対話」は「国民結束の日」と同様に対話を通じて社会関係資本の強化をもたらしことが期待され、その強化を通じて、「平和と結束」につながっていくことが期待されている。「国民結束の日」と「国民対話」とは共通部分が多い。それは「国民対話」がボトムアップとトップダウンの組み合わせで広く国民を巻き込んだものであるからである。

新しい国の建設のためには、治安の安定や経済発展のための開発が必要なことは論を待たない。しかし、それと同時に州や民族を越えた国民間の信頼の醸成といった社会的結束が、国家建設を考えるうえでも極めて重要である。国民間や国民と政府などとの間の信頼関係が、国家建設の基礎である。そのことを現場で生活をするなかで改めて痛感した。実際に2016年7

月に紛争に巻き込まれ、私が乗車していた車が被弾した経験のなかで、紛争が国民に与える影響を目の当たりにし、その思いは、さらに強まった。繰り返し、紛争が行われ、親族や家族が殺されるなかにあっても、お互いを支えながら南スーダンの国民は生活を再開している。まさに、川に壊されては堰を作り、また、壊されては堰を作るように何度でも何度でも立ち上がった。いこうとしている国民が存在する。

国際社会の「誰一人取り残さない」ことを宣言した持続可能な開発目標（SDGs）に向けた取り組みを考えると、南スーダンにおいてもその宣言に沿った取り組みが求められる。そして、南スーダンにおいても誰もがスポーツを安心して行える日がくることが待ち遠しい。

前述してきたように、南スーダンではサッカーは広く全国的に行われているものの、それは男性を中心とするものである。他のアフリカ諸国と同様に、南スーダンにおいても女性のスポーツの参加率は、公式データはないものの限定的である。首都ジュバでさえ、男性がサッカーを行っている姿が目立つが、女性がスポーツを行っている姿はあまり見られない。ジュバを少し離れば、スポーツを行う環境は制限される。ワウなどの一部の大都市であればジュバの環境に類似しているところもあるが、都会だけでなく、全国の村レベルまで浸透していくことによって、初めてスポーツを国民が楽しめるようになったと言えるだろう。スポーツが男性だけのものではなく、女性もスポーツに参加していくことにより、スポーツを

通じた一体感などを享受することが可能となる。スポーツにおいてもジェンダー格差をなくし、スポーツへの参加が増加していくことが望まれる。そこで、女性がスポーツを行うことや継続することが困難なのか、困難だとすればどのような要因があるのかを知るとは、今後の対策を検討する上で重要であろう。仮に全国を代表する選手たちでさえ、スポーツを行うことや継続することが困難であれば、なおのことその改善も含めた取り組みを行っていくことが求められる。男女を含めた全体的なスポーツの参加率を向上させることによって、本書で検証したようにスポーツを通じた平和構築支援のさらなる効果の向上にもつながるであろう。

そこで、第5回「国民結束の日」に参加した選手、コーチ、大会関係者に女性がスポーツをすることや継続することの課題や難しさとはどのようなものがあるのかを確認することとした。証言からさまざまな要因が挙げられたが、その共通する主なものを記載する。

まず、女性がスポーツを継続することの難しさの要因として、多くの選手から挙げられたものは、多くの国が直面している家事や育児の問題であった。

また、家庭内での女性の役割に加えて、親、夫、コミュニティの理解不足が存在していることも共通した証言として出された。例えば、「スポーツは男のものだ、お前は専業主婦になるんだから、スポーツをするのは時間の無駄だ、スポーツをする時間はない、家で働け、と

娘に言う家庭もあります」(FGD、サッカー、男性)。「スポーツに参加しないパートナーと結婚した場合、その男性はスポーツの重要性を知らないのです、妻がスポーツをすることを許さないのです」(KII、サッカー、男性)。「男性が女性のスポーツを否定する理由は、この女性を外に出したら、他の(男性を)探しに行くかもしれないと考えるからです」(FGD、バレーボール、女性)などが述べられた。これらの証言は、スポーツにおいても男性を女性に従属させる文化規範が蔓延していることを示している(Bubbenzer & Lacey, 2013)。

さらに「コミュニティは、男子を励ましサポートするように、女子のスポーツ参加を奨励しません」(FGD、サッカー、男性)、「スポーツには文化的側面もあり、スポーツ、サッカー、バレーボールや陸上競技を女子の遊びと見なさない民族もあります」。また、「彼女(参加者)がスポーツに参加したとき、人々から、女の子がスポーツに参加すると将来が埋もれると言われ、スポーツを無駄なものとして見ていることが多くの女の子を落胆させました」(FGD、大会関係者)。このように、スポーツをする女性に対する一般的な理解不足が最も多く挙げられており、家長長制のもと、コミュニティ内でスポーツに対処しようとしたネガティブな認識が、女性がスポーツを始めることを躊躇させる原因にもなっている。

また、女性がスポーツをすることに對する迷信や偏見も、女性がスポーツをすることを難しくしていることがわかった。例えば、「たくさん走ると子供を産めなくなると言う人がいま

す」(FGD、陸上、女性)、「バレーボールをすると体が変形すると思ってる人がいます」(FGD、陸上、女性)。スポーツをすることが出産や体型に与える影響に関するこうした言説は、女性だけでなく社会にとっても大きな関心事であり、女性がスポーツをすることを社会的に容認できないものになっているのかもしれない。

こうした迷信や偏見に加え、社会的・文化的な課題も数多く挙げられた。具体的には、年齢や早婚などの課題をあげる証言が多く出された。例えば「22歳の自分を見たら、スポーツをするには年寄りだと馬鹿にされるかもしれませぬ」(FGD、バレーボール、女性)。「彼女たちは困難を抱えています。なぜなら、ほとんどの女性はまだ若い、12〜13歳くらいのときに妊娠するからです」(FGD、サッカー、男性)。「非常に家父長的な社会であり、女性には何の権利もないと考えられています。また、ここでは若者の話をしていきますが、南スーダンの多くの女性は若者ではなく、子供から母親になり、若者である時期がないのです」(KII、大会関係者)。この発言は、女性が若々しくいられる期間が短いことが、女性がスポーツをすることの難しさを増していることを示唆している。